

聖書之真理

第五十五號

十二月號

主筆 江原萬里

我等の求むるところ

我等の權威

日本は何處に往く(下)

エレミヤ記の研究

農村の宗教的墮落

悔改可能か亡國必至か

輓近考古學と舊約聖書

アブラハム觀

過去追想

柏木通信

祖父の書翰

一千九百三十一年を送る

主筆

主筆

江原萬里

江原萬里

江原萬里

小栗襄三

齋藤宗次郎

齋藤宗次郎

齋藤宗次郎

江原萬里

編輯餘錄

編輯餘錄

昭和六年二月一日發行

千九百三十一年を送る

●本年の世界的最顯著の事件は、ドイツの經濟的破綻に次で、嘗て世界の金融の中心であつた英國も亦信用を失墜し、金本位制を停止した事である。その影響は全世界に及び、我が國も亦大なる不安に襲はれて居る。世界經濟の立直りは、ドイツの賠償金の處分をなさざる限り、永久に不可能である。世界列國に此の勇氣があるか。

今や大戰終了のベルサイユ條約の不當が明白となつた。各國はドイツに對する怨恨に驅られ、戰爭の責任は各自に在る事を思はず、悔改めず、全責任を戰敗國ドイツに課した。此の結果は『戰爭をやめるための戰爭』に参加した此等諸國が、大戰争再來の惡夢にうなされて居るのである。如何にして此の混亂より脱出し得るか。凋落の秋は天地に滿ちて居るではないか。

バルホアーは社會衰滅の原因として史家が列擧する原因の眞因にあらざる事を論じて『史家が破滅の團落に先行し、且つ明白に之に貢獻した社會的混亂を列擧するのは無益である。内亂、戰敗、饑饉、疫病、暴政、誅求、負擔苛重、富の減退——我等の眼前に暗澹たる目録は展げられるが、我等は感ずる、此等病患の或る者は、健全なる公共體に在つては容易く切抜き得られ、他の者は或る原因不明の病源から來る第二次的徵候である事を。何れも皆我等の探求して居るものを充分に説明しない』と。

現今の世界的混亂、そのための衰弱は、實に或る深刻なる病源か

ら發生した第二次的徵候である。されば此等の社會的混亂の眞の病根は何處に在るか。曰く、人々眞の神を見失つた事がそれである。

近代の科學と哲學とは彼等の父祖の信仰を破壊し、主イエスの御父なる神を認めしめず、彼等は御獨子の苦難の死に由つて人の罪を全部赦し、且つ之に由つて己を示現し給ふた神を拜しない。

其の結果は靈的頹廢である。靈的不一致である。正義よりも幸福を求め、愛よりも闘争を好む。胸中平安なく、希望なく、満足なく、感謝なく、歡喜なく、靈魂は云ふべからざる空虚を感じ、徒らに焦燥、己を生かさんとして『生存競争』を事とする。肉に富まんとして靈に於て窮した。强健なる精神的一致にあらば容易く解決し得る事も解決出来ない。エレミヤの預言は現代に甚だ適切である。

●我國に於ける本年の最大事件は、云ふまでもなく滿洲事變である。早晚來るべしと豫期された事が不幸なる事實として出現した。支那全土動亂の徵あり、禍亂は東洋より世界に及ぼんとする。

此の事變に於て我國は世界の輿論の反對を受けた。されど外よりの非難攻撃は少しも恐るるに足らない。恐ろしい事は我等果して神の前に義しくあるかである。若し義たらんか國滅ぶるも亦興る。義ならざらんか興るも滅ぶ。權益の擁護、生命線の死守、或は又亦化防止は以て神の前に義たらしめない。『人の義せらるるはキリストを信する信仰あるのみ』。此の信仰に由つて利己的闘争に超越し、全東洋を包容し得る。今後『日本國の柱』たるものは之以外にない。我等基督者の責任や實に重且つ大。

聖書之眞理

第五十號

昭和六年十二月一日發行

我等の求むるところ

主 筆

我等の求むるところは教會にあらず、無教會にあらず。我等は我等の暗い心に光明の神を認め、冷たき心に愛の神を感じ、邪なる思が義しき神に導かれ、常に義しく、潔く、平安あり、希望あり、喜悅に満ち、愛に溢れ、人と和し、眞實善き生活を爲さんことを欲する。

若し之が教會に入ること得られるならば、喜んで教會に入る。されど現今何處の教會が之を我等に與へるであらうか。此れ故に多くの人々は教會に入つて失望する。そして教會外に出でゆきて

救を求め。然らば何處に往かば之を得られるであらうか。無教會主義を唱ふる者は必ず之を與へるであらうか。或は然らん。或は然らざらん。

救は教會の内外に由らない。主イエス・キリストに在る。多くの人は、過去千九百年の前にユダヤに生れ給ふたイエスが、現在の我が靈魂に、そんな直接の交渉があらうとは思ひもよらない。彼等はイエスの教を信じ、其の行を模範とする。彼が十字架を負うて啓き給ふた荆棘の道を自ら辿ることが救の道であるとする。救とは、今尙常に戸外に立ちて、我等の靈魂の戸を叩き給ひつゝある彼を迎へ容れ奉ることである事を知らない。

救は今活けるキリストに在る。故に私は教會主義を唱へず、無教會主義を唱へず、唯キリストと、彼が我等を救はんために忍び給ひし十字架の死の意義を説く。我らの靈魂の深き欲求にして、彼に由つて満されないものは一つもない。

我等の權威

主筆

我が國の昔、僧日蓮は法華經の絶對的眞理こそ

の功德を確信し、之を宣傳して云つた。『此の身を法華經に替ゆるは、石に金を替へ、糞ふんに米を替ゆるなり』と。又云ふ『法華經の肝心諸佛の眼目

たる、妙法蓮華經の五字、末法の始に一閻浮提えんぶだい（世界）に弘まらせ給ふべき瑞相に日蓮先驅したり』。

故に『日蓮によりて日本の有無はあるべし』。されば『縦たゞひ頸くびをば鋸のこぎりにて引切り、胸むねをば稜へしほこ鋒とぎを以て突き、足にはほだしを打ちて錐きりを以て揉もむとも、

命の通はん程は、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經を唱へて、唱へ死しせんぞ。

然るに今日にては、人は之だけは絶對確實となし、其のためには死をも厭はない程の何物も有たない。忠君愛國も今は當にならない。之を古今に

通じて謬らす、中外に施して悖らすとする眞理を有つて居ない。實に現代は權威の喪失時代である。人は何物をも疑ひ、何物にも據り頼み得ず、浮草の如くに漂ふ。之我等の堪ゆるどころでない。

昔時ロマ教會の盛んであつた頃は、人々教會を以て普遍的眞理の權威とし、之に服従することに由つて己れ絶對的眞理に立てることを確信した。

近世に至り、新敎主義に由つてロマ教會の基礎動搖し、『教會の權威』が失墜するや、之に代つて『聖書の權威』が主張せられ、聖書にかく記してあると云ふ事が、日蓮の法華經に於ける如く、人々の所信の最後の根據となつた。

然るに近年聖書の高等批評なるものが發達し、之がため從來全部神言無謬とせられた聖書の記事に對し、疑義生じ、多くの人々の間に著しく其の權威を墮すに至つた。而して自然科学の發達、殊に進化論の唱道は聖書の記事と衝突するところあ

り、其の融合調和は今日に至るも尙容易ではない。爰に於てか、舊來の聖書の權威を其の儘保持せんとする『根本主義』と、新興科學との調和を計らんとする『近代主義』との對立を見るに至つた。

されど、『科學の權威』は人生の指導原理として、到底『聖書の權威』に代る程有力ではない。科學は日進月歩し、新説は忽ち舊説となり、其の眞理とするところは常に轉變して止まない。科學は我等に何が萬世不易の眞理であるか教えず、科學の新説に確乎不動の確信を置き得ない。

現代人は實に五里霧中に在る。教會の組織にあらず、聖書の文字にあらず、又科學の新説にあらず、人はそも何に據つて立ち、何に據つて歩むか。爰に於て我等は更に一層の熱心を以てナザレのイエスを仰ぎ見るに至つた。爰に獨り衆と全く異なる特殊の人格がある、彼はサドカイ人の組織的宗教を否定し、神殿の權威を退け、パリサイ人の傳

統を排し、律法の權威を否認し、之に代へて自己の權威を主張して曰く、『まことに、まことに、われ、なんちに告ぐ』と。之を聽きたる『群衆その教に驚きたり。それは學者らの如くならず、權威ある者のごとく教へ給へる故なり』(マタイ傳七・二八) 彼自身が最後の權威、古來將來何人も何物も、己以上に深き眞理なしと斷言せられたのである。

彼は又云ひ給ふた。『凡ての物は我わが父より委ねられたり。子を知る者は父の外になく、父を知る者は子、また子の欲するまゝに顯はすところの者の外になし』(マタイ傳二・二七) と。宇宙萬物は神の創造攝理し給ふところ、それを神は、ナザレの大工の子なる彼に委ね給ふたとの宣言である。彼が眞の神にあらずば、之一狂夫の言である。彼は神を父と稱び、自らを子と稱び給ふた。而して『子を知る者は父の外になし』と。我を知る者は神の外にないこの事である。又その神を知る者は

彼の外になく、彼はその知るところの神を、彼の欲するまゝに人々に知らしめ、之に由つて神は物的力にあらず、盲目の生命にあらず、我等の靈魂の父に在し給ふ事がわかることの事である。何人も彼に由らでは眞の神は之を知ることを得ず、之と義しくあることを得ないとの宣言である。

彼は此の權威を以て我等に臨み、彼の奇しき人格を以て父なる神の御姿を地上に顯はし、其の義は崇高、其の憐憫は深甚、其の能力は癩病を癒し、數千人を養ひ、死者を甦らしめ給ふた。然かも萬人に絶倫し、古今に無比、時空を超越する其の偉大を以てして、謙遜限りなく、『凡て勞する者、重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負ひて我に學べ。さらば靈魂に休息を得ん』といひ給ふた。宇宙萬物を支配し給ふ一天萬乗の君が、萬人の僕となり、その足を洗ひ給ふた。

此のイエスが我等の罪に代りて死し、死して甦り、その復活の生命を我等に與へんとして、今も尙聖靈を以て我等に臨みたまふのである。我等彼に全心全靈全身を委ねば委ぬ程、益々彼の生命は我等の衷に充溢し來るのを覺ゆる。貧富何かあらん。毀譽何かあらん。刀鋸鼎鑊甘きこと飴のごとし。來るべき光榮の御國は既に眼前に在ることを覺ゆる。

實にイエス・キリストに據つて、我等は萬世不易、千古不磨の眞理に立ち、其の證明者たり、神の國の先驅者たり得る。各々確信を以て斷言し得る『我等に由つて日本國はあるべし』と。『此の身を以てキリストに替ゆるは、石を黄金に、糞を米に替ゆる也』である。さらば『縦ひ首をば鋸にて引切られ、足は錐にてもまるごも、生命の通はん程は、イエス・キリスト、イエス・キリストと唱へて、唱へ死せんである。』

日本は何處に往く (下)

江 原 萬 里

四 我が國體の危機

然るに多年歐洲に蓄積醞釀した妖氣は、遂に爆發して世界の大戦亂となり、都市を焼き、田畑を荒らし、同胞をして互に殺戮せしめ、死者千萬人は屍を野に曝らした。過去幾多の歲月の間傳統の人類共存共榮の原理は破れ、その上に建設された社會の諸制度は動搖し來つた。戦亂は一時鎮靜したが、凡てを否定破壊せずば已まないサタンの呪詛は沈潜下降、以て今日の世界的大不安の因となり、經濟的大恐慌を起さしめ、人心は益々恟々、再び大戦争の必至に脅えて居るのである。

嘗て秦の始皇帝が萬里の長城を築き、北蠻の中國に流れ入る事を抑止してより、民族の流は此の時より西へ西へこ向ひ、拔都の西征、チムールの

壯圖となり、土耳其の歐洲侵略となり、遂に蠻族は歐洲に雪崩の如くに侵入してロマ帝國を滅ぼし、過去千數百年のギリシヤ、ロマの文明を悉く破壊し去つた。今や其の過ぎ行くところ、青草も生せずと云はれた彼等の酋長アツチラの如く、第二のアツチラは歐洲より起つて世界を蹂躪し、其の後に建設した數百年來の文物諸制度を悉く破壊せずんば已まない勢を以て暴虐を恣にして居るのである。世は滔々として急流の如くに變轉しつゝある。大渦卷は東洋にも波及し、爲めに我が國在來の國家社會の組織を破り、諸制度を吞去らうとして居るのである。之がため我國の文物制度の根幹である皇室中心主義も亦大なる脅威を受けるに至つた。最近勃發した共產黨事件の如き、その僅かなる一例である。然かも之がため如何に朝野の指導者たちが震駭した事か。

私は、皇室中心主義の我が國體に對する脅威の

原因として、其の主要なるもの三つを擧げ度い。

一 獨逸帝國の崩壞 大戰前『凡てに優越する獨逸國』と叫んで、帝王神權、國家至上主義を唱へ、内は鞏固なる統一を作り、力は即ち正義なりと云ひて、外に國民的大發展を試み、世界的霸業を夢みた獨逸帝國の周到なる計劃は悉く晝餅に歸し、霸業遂に成らず、今は見る影だになき姿となり終つた。爰に於てか、心ある人士は、一つの中に由つて内は鞏固なる統一となし、外は大なる膨張を計らんとする國家至上主義乃至帝國主義に對して、大なる疑惑を抱くに至つた。現存國家と正義とを同一視するヘーゲルの國家論は、他の何物にか代へられなければならないと思ふに至つた。ヘーゲルの國家哲學、法律哲學の感化を受けること多大である我が國の官學的憲法論は、之がため大なる影響を蒙らざるを得ない。

二 社會科學の發達 嘗ては、國家と社會とは

同一視された。天下國家と云ひ、國家社會と一口に云つて仕舞つて、其の間に何の區別をも考へなかつた。然るに近來社會的諸現象の精細なる研究は二者を明白に區別するに至つた。社會には國家以外の各種の團體が存在する。そして人類の社會的生活は此等各種の團體が續出し、夫れ夫れの機能を發揮し、夫れ夫れが人類の生存の要求の各方面を満足せしめる事に由つて、益々向上發展する事を認めるに至つた。そして國家は此等の團體の一つに過ぎない事を認めるやうになつた。

人類の社會生活の最初に於ては、一つの團體以外に何者もなかつた。それは家族であり、國家であり、又教會でもあつた。此の長者が君主であり、又大祭司であつた。然るにその團體内の各員の自由が發達し、獨立の氣風生じ、人格觀念が明白なるに従ひ、家族は益々其の範圍を縮少し、只夫婦親子を其の主たる構成員とし、以て益々家族と

しての機能を發揮し、國家は家族より分離して國家の機能を完くし、教會も亦國家より獨立して別種の存在となつた。これ個人の人格の發達の必然の結果であり、而して人類の社會生活はそのために却て密接となり、益々向上したのである。

されば國家と人類社會生活を同一視してはならない。國は滅び、又興る、然し國滅ぶる事は同時に人類の社會生活が全く無になる事ではない。國家はヘーゲルの云ふ如き人類社會の目的でなくその最高の道徳でない。それは人類社會の目的達成の手段たるに留まる。而して其の手段たる任務を完くしない時は國家組織は崩壊するのである。

近來社會科學の發達は、國家は其の内なる一階級の特種の利益のために、全體の社會生活を阻害することのある事實を認めるに至つた。大戦争の勃發が國內の大資本家の利益のために誘發せられ易く、又戦争に由つて暴利を擲し、貧富の懸隔を

大にし、勞働者階級との利害の衝突を來すこと多い。此の國家と階級との關係に關する研究は益々國家至上主義に對して大打撃を與ふるに至つた。之がため我が國に於ても、國家至上主義乃至皇室中心主義を我等の生活の根本原理とする、從來の國家觀念を首肯しない者が出て來た。その最尖銳は云ふまでもなくマルクス主義者である。

三 ロシアの社會革命 現代の經濟生活の根本原理は各人の自由に在る。即ち、人々は各々其の好むところに従ひ、職業を選び、物を生産し、又所得を以て他の物を購求し、或は購求せず、之を貯蓄し得ることに在る。

然るに大戦争の後に生じたロシアの社會革命は、此の原理を根本より覆し、その上に建設せられて居る現代世界の經濟組織、社會組織、國家組織を悉く廢し、新に社會的一定の統制の下に經濟生活を、又社會諸班の生活全部を規律する事を目的と

して敢行せられたのである。

之がため、ロシアに於ては二十世紀の文明世界の七不思議の一とせられた専制君主政治の典型であつたザアールは一朝にして悲惨極まりなき没落を遂げた。此の革命運動は嘗にロシアだけに留まらず、國境を越えて全世界に派及し、各國の國境を徹廢し、嘗に國家の諸制度のみならず、あらゆる在來の社會的階級的諸制度及び道德を悉く覆滅して、此の新規なる經濟的原理の上に世界的共產社會を建設しやうとする運動が生ずるに至つたのである。之が我が國體に對する最大の脅威たることは云ふまでもない。北方よりの黒雲に我が國の朝野の指導者たちはうなされて居るのである。

五 日本は何處に往く

今や世界は益々混亂し、人心は益々動搖し、光明は去つて暗黒之を覆ふ。此の中からごんな怪物

が出て來るかわからなくなつた。在來の道德は頽廢し、淫蕩氣分は漲り、只寸前を樂しむ者が多くなつて來た。一方舊勢力は其の勢力を回復しやうとして益々勉め、戦後一時形を潜めた國家主義は最近再び擡頭し來た。各國關稅の障壁を高くし、自給自足主義を採るに至つた。排外思想は盛なつて來たのである。

かく舊勢力は新興勢力と闘ひ、舊思想と新思想と、國は國と、民は民と相争ふ。地震あり、洪水あり、經濟的恐慌あり、此後疫病もあるであらう。其の間に在つて人間の邪惡は愈々白日に曝され、姦淫、鬭争、欺瞞、掠奪、裏切、殺人の惡魔は跳梁する。歴史上未曾有の盛觀とせられた歐洲文明は崩壞の道を辿りつゝある。獨逸帝國の覆滅の道程は今後世界文明諸國の辿るべき道程である。之に代ると稱するロシア革命もその一過程に過ぎない。借問す、此の混亂を前にして、萬國に誇るに足

る我が國體は果して生き延び得るか。皇室中心主義は果して我が國の政治經濟社會の諸制度を崩壞より救ひ、之を暗黒の彼方光明の郷に導き得るか。國民に平和と繁榮とを齎らし得るか。

エレミヤが生れ出た頃は丁度これに似た世界的狀況の下に在つた。一方に武力によつて世界的大帝國を建設したアッシリアの没落あり。その文物諸制度の崩壞があつた。之に伴うて諸民族の動搖が生じた。此の時に當り他方エレミヤの故國にては、アブラハム以來のその國體の精華を確保發揚しやうとして、申命記に由る宗教的、政治的、社會的大改革が斷行せられた。然かもその神殿中心主義の一教會一家族一國家なる國體は、世界的動搖の前に何の役にも立たず、其の宗教制度と國家組織とは悉く滅び、その民の選良はバビロンに捕へ移された。エレミヤが神殿に立つて、國王、祭司、預言者、民衆の反對迫害を物ともせず、大聲叱呼

して國民に預言して云つたその通りとなつた。

『汝ら是はエホバの神殿なり、エホバの神殿なり、エホバの神殿なりと云ふ虚言に頼む勿れ。

……我シロ（既に滅亡したる北方イスラエル國の神殿）

になせし如く此の神殿にもなさん。我は汝らの兄弟なるエフライムの全後裔を棄て去りし如く汝らをも棄て去らん』（エレミヤ記七）。

然かも國破れ、田園荒廢し、民は異境に捕はれて呻吟すること數十年、彼等は再び大なる希望を以て起ち上り、再び故國に歸へつて荒塚を起し、新たに國を建設し得たのはそも何の力、誰の業であつたか。エレミヤの研究は決して二千六百餘年前、我國の神武天皇時代の古文書の研究ではない。遠き古の見知らぬ異國の、一人の『泣き男』の研究ではない。現在の日本の、我等の現實の生活の根本原理の研究である。

エレミヤ記の研究(四)

三 農村の宗教的墮落(下)

江 原 萬 里

罪の深刻とその證據

神の民はかくの如く『活ける水の泉なる』エホバを棄て、その契約に背いた。而して『己れ自ら水溜を堀り』、その水に由つて生きやうとした。然かも『それはひび破れて、水保ち得ぬ水溜』であつた。それ故に彼等は生命の水を得んごて或は「エジプト路をナイル河に」、或は『アッシリア路を大河に』行つたのである。自國の獨立自尊心の喪失、外國文化の隨喜の根本的原因是エホバに背いた事に在つた。それは故意に背いたのである。人々が眞の神を知らないのは無知なるが故ではない。邪惡なるが故である。神の御心は良心に感じ得られ

る。然かも故意に之に背いて、人は遂に神を見失ふのである。神の民たるイスラエルの此の背戻の罪の如何ばかり深刻なるかを見よ。

二〇 多くの昔に汝は鞭を折り、

その束縛を絶ちて云ふ、

『われは仕へまつるまじ』と。

さるに汝は高丘の上、

何れの青木の下にても、

妓女の如く寝をべり返へる。

二一 われ汝を貴き葡萄の樹、

純眞の種として植付けしに、

いつしか汝は癩り變りて、

野葡萄とはなり果てたる。

二三 假令曹達をもて自ら濯ひ、

灰汁を之に交ふとも、

我が前に汝の罪は滲みぬ。

汝の神エホバの御言。

彼等の心は既に變種した。豊醇の酒を造るべき葡萄の樹は變りて野葡萄となり果て、別の者となつて仕舞つた。其の罪の深く滲透せること、如何なる善き教訓も模範も之を改めさす事は出来ない。然かも彼等自身その事を知らない。自己の性の善を信じ、天地も容れざる罪人なる事を感じない。

二三 汝いかで云ふ「われは汚れじ、

われバアルに服ひたることなし」と。

視よ、谷間に在る汝の道を、

そこに爲したる汝の行を。

彼等は云ふ、我等はエホバを忘れて、バアルに服つたのではない。只農業を營む必要上バアルを祀つたまでである。又國の滅亡を防ぎ、外國と修交する必要上アツシリアの神を祀つたまでである。イスラエルの眞の神はエホバなる事は勿論之を知

る。されど經濟は經濟、政治は政治、皆別である。否、我等心にエホバを拜しつゝある故に、バアルを祀り、又他國の神を祀りて何等良心に慚ぢないのである。視よ、一度國難到り、危急存亡の秋に會へば、必らずエホバに祈るではないかと。

然らず、汝らエホバに祈ることも、拜する汝等の心が眞實の靈性を以て拜せず、又拜せらるべきエホバが只の名稱に留まり、眞實の神でなかつたならば、それは美名を以てする偶像崇拜に過ぎない。『視よ、谷間に在る汝の道を』。彼等はマナセ王の時以來、他國の神を拜したために蒙つたエホバの怒を宥めるため、國難に際し、そこにエホバを祀り、之に幼兒の生命を犠牲として献げた。かゝる殘忍なる心を以て神の怒を緩和しやうとし、又神はかゝる犠牲を喜び給ふと思ふ汝等の愚よ、汝等の心の背戻は此の一事を以て知り得る。

風規頹廢と淪落

農村がかくの如く活ける水の泉なる眞の神エホバに背き、之に仕へず、偶像を崇拜し、之に五穀の豊穰、一家の幸福を祈り求めた結果は、人々物質主義となり、享樂主義に陥り、農村の風規は頹廢して淫蕩となつた。

二四 若き牝駱駝のふざけ散して、

こゝ彼處にと馳せ廻りぬ。

曠野になれたる若き牝牛の

己が肉慾の熱に驅られ、

情に浮かされ風にあへぐ。

誰か之を制むるを得ん。

二五 汝云ふ『制むるは無益なり、

われ見知らぬ者と戀に落ち、

これを慕ひ行けばなり』と。

かくの如く彼等は家郷を離れ放蕩に身を持ち崩

す。然かも蕩兒が淪落の果て困窮して故郷の父母を思ふやうに、只その時のみ神を思ふのである。されど災危一度彼らを去るときは元の放蕩を續ける。エレミヤの皮肉は此等の者に對して爆發する。

二七 彼らはわれに背を向けて、

その面をわれに向けず。

されど禍に遭ふときは

「起ちてわれを救へ」と云ふ。

二八 汝の造りし神々は何處ぞ、

彼等起つべし、禍の時に、

若し汝等を救ひ得べくば。

そは汝の町々の數ほぎに、

ユダよ、汝の神々はあり。

彼等は己が不幸に陥るも之を救ひ給はざる神の無情を恨む。されど之を恨む理由があるか。何ぞその不幸に由つて己が罪を反省し、之を神の愛の鞭、己が罪の懲らしめとして忍び受けざる。

二九 汝われに向ひて何を争ふ。

汝らは皆罪人なり。

汝らわれに皆背きぬ。

エホバの御言。

三〇 われ汝の子らを打ちしも無益、

汝らは懲戒を受けざりき。

三一 あゝ今の人よ、汝エホバの御言に注意せよ。

われイスラエルに砂漠なりしや、

又黒暗の土地なりしや。

何故我が民は云ふや『我等離れて、

最早汝に廻り遣うことあらじ』。

三二 處女その飾を忘れ、

花嫁その帯を忘れんや。

されど我が民のわれを忘れし、

其の日の久しさ數え難し。

人が神を慕ひ求むることは、處女が衣裳を好む

と同様その天性である。殊にイスラエルの民は特

別に豊かなる宗教的天分を恵まれた者であつた。

然かも其の背信既に久しく、エホバを忘れ、最早

彼に廻り會ふことあらじと思ふ程、眞の神エホバ

より離れたのである。彼等は最早そのために惱ま

ない。彼等の悩みは、只自分が他人程物を有たず、

他人程樂しめない事だけである。此の天職の抛棄

に罪の審判が臨まないわけがあらうか。

三五 されど汝は云ふ『われは穢れず、

神の怒われに臨まじ』と。

視よ、われ今審判を行はんとす。

汝罪なしと云へばなり。

農村の疲弊と淺薄なる後悔

エレミヤは民がエホバに背いた結果を思ふて、

農民の將來を憂惧した。前にも云つた通り、エレ

ミヤに取つてはエホバ程明白確實なる實在はな

つた。彼程明瞭且つ強烈なる人格を有し給ひ、絶對に服従を要求し、其の聖意を己が意志とする事を求め給ふ者はなかつた。それは夫が妻に對し、夫の心全部を受容れ、それに服従し、それと一體となる事を要求する如くであつた。かやうにイスラエルの民がその夫なるエホバに服従せば、活ける水の源よりして、彼から國民的生命は滾々として湧き出でる。

然るに民は此の神に背いた。其の結果は自己の目前の快樂に耽溺し、バアルを拜して山上の祭は喧騒を極め、祭終つて夜更けて後も空しき逸樂に耽けつた。内に確固不動の道德的自由獨立心を喪失して、徒らに外國の文化を慕つた。崇高なる國民的理想は彼等には風馬牛となつた。此の結果は風規の頽廢、農村の疲弊荒廢である。一度他國が侵略し來た時は一たまりもなく滅亡するのである。

エレミヤは之を憂ひ、如何にかして農民をして

悔改めて彼等の本心に立ち歸へらしめ、雄大強健の國民たらしめんかに心を摧いた。彼は農民を熱愛すればする程、彼等の心のうちにわけ入り、其の罪を己が罪とし、己れ自ら農民に代つてその罪を嘆じ、農民も己の如くにその罪のために嘆じつつある如く感じた、而してエホバも亦之に應じてその罪を赦し。農村を荒廢より救ひ出さんとしつつあり給ふ如く感じた。然し乍ら、それは只彼の願望の書き出した空しき光景に過ぎなかつた。

二 聞けよ、^{トバ}禿山よりの聲を、

イスラエルの子らの哀訴。

そは彼等往く道を違へ、

その神エホバを忘れたるため。

三 『あ、背ける子らよ歸へり來よ、

われ汝の背反を癒やさん。』

『われは此處に在り、汝に往く、

なんぢは我が神エホバなり。』

二三まこと、丘の祭壇は欺瞞にして

山上の祭は只の喧騒、

唯、我が神エホバにのみ、

イスラエルの救はあり。

二四されどバアルは我等の産業を、

若き日よりの我等の父祖の、

羊の群、牛の群、

又其の子らを食ひ盡せり。

二五恥ぢて我等は低くひれ伏す、

我等は慚愧に覆はれぬ。

そは今日に至るまで、

神に向ひて罪を犯し、

我等の神なるエホバよりの

御聲に心を留めざりせば」(第三章)。

農村の疲弊、農民の困憊に由る此の悔改の聲が、

果して彼等の本心から出たものであるか否かは怪しい。今まで逸樂に耽つた者が一度事業に失敗し、

又は病氣に罹り、淪落の果て過去の罪を後悔した

りて、其の後悔が何の益にならう。再起の力、

復興の生命は後悔からは出ない。後悔は己が心を

益々蝕み、猶残存する生命を枯らすのみである。

新生命は神と義しき關係に立歸へることに由つ

てのみ、始めて之を獲得し得る。眞に神を知るこ

と、その憐憫を身に泌みて感じ、之に由つて心が

一變し、神の聖意に服従することを己の本心より

の喜悅とする時に來る。されば此の空虚なる後悔

に對し神は彼等に更に深刻なる悔改を要求し給ふ。

三 なんぢの休田を鋤き返せ、

雜草の上に蒔くこと勿れ。

四 神のみ前に割禮を行ひ、

己が心の包皮を取去れ (第四章)。

現今我が國農民の深刻なる疲弊の救済策として、
又年々増加して已まない人口の食糧供給策として、

識者の間に考へられて居る事は、田地の深耕問題である。即ち現在より更に數尺を深耕する事に由つて、多量の收獲を擧げやうとする事である。然れども夫よりも尙重要、否根本的重要は我が國の農民の心を如何に深耕するかである。そこに國民的生命の新らしき資源を發見することである。エレミヤの時代のユダの農民と少しも異なるところがない。

嗚呼、されどどうしてそれが可能であらうか。佳き葡萄の樹として植付けられたイスラエルの民の靈性には、雜草生ひ茂り、土壤は惡菌の巢ふところとなり、其の根は變性し、遂に野葡萄に化して仕舞つたのである。どうして此の雜草を刈取り、土壤の包皮を焼き盡くし、之を深耕し、そこより養分を攝取し、人の心の奥底に潜める人間の本性、神が己が像に肖せて創造し給ふた靈魂を活かす事が出来るであらうか。之が眞の悔改である。而して

それは人には不可能、神のみよく之をなし給ふ。神は今やイスラエルの民の背信の罪を罰するため、北より禍を來らしめんとし、預言者エレミヤを召して之を預言せしめ給ふた。あゝ北禍！ 現世的、經濟的、肉慾的耽溺に墮落した宗教の『打倒』のために、北方より蠻族は襲來しつゝあるのである。大帝國は滅び、他の大帝國は興りつゝある。大革命の津波が追寄せつゝある。そしてユダは遂に滅び、その神殿と町々村々の宗教は滅ぶ。墮落した虚偽の組織的宗教はかくして打倒されるのである。只然し、此の北禍こそは、神がイスラエルの墮落虚偽を罰せんがために招き寄せ給ふたのであつた。虚偽の儀式と神殿と宗教政治と固定せる信條は滅びる。然かもそれは神がなし給ふところである。神は始めから終りまで、大なる御手を以て人類の歴史を導きつゝあり給ふ。神は今や嚴肅なる刑罰を以てその民に臨み給は

んとする。然かもそれは一面神の大なる恩恵である。大なる不幸、類なき災禍が身に及ぶのは、神が我等の心田の雜草を拂ひ、休める土地を深耕し、之に新らしき種子を蒔き給はんがためである。それは我等の罪に對する神の嚴肅なる刑罰であるが、又暗く見ゆる、神の大なる御救の恩恵である。我等は此暗雲の彼方に、永遠に輝く御國のあることを知る。されば罪に悩み、悲痛に泣く虐げられたる者よ、忍びて待て。やがて大なる光は照り出づるであらう。私は此の事を語る前に、更に都市の社會的腐敗と、此等の雜草を刈り取るための大なる災禍について語らねばならない。

我國東北地方の百姓困窮して娘を市に賣るゝ傳へられる。之について下に轉載した東京朝日新聞紙上の投書はエレミヤ記研究に參考となるであらう。此の困窮の原因は社會主義者の云ふ如き、只階級的搾取にない。もつと深いところに在る。

山形縣娘地獄

私は、山形縣最上郡の一農村小學校に教鞭を取つて居たことがあるが、その村でも長年の間妙齡の娘を都會に賣りだす事があるが、しかも平然と行はれてゐた。ある夏の日、庄内の鶴岡市に賣られた小娘が實家に不幸があつて歸つた時、小學校の庭で女生徒の話題の中心になつたのは、その小娘が如何に美しい衣服をまとひ、如何になまめかしく腰をくねらせたかといふ事であつた。しかもそれが極めて美望的な熱意を以て語られてゐるのを聞いて全く驚いた。何がかくも淺ましい社會相を産み出したか。

第一は、拜金思想である。娘を賣つて大金を得たら、南洋に出かせぎ中の息子から送金してもらつた時のやうに『うちのおばこ(娘)もえらいもんだ』と喜ぶのである。

第二は、生活に追はれて一家團圓の時間が短い事である。この節は遠い山奥で炭焼をする村民が多い。朝未明に家を出て夜暗くなつてから歸る、山に寢泊りすることも少くない。子供時代は親の顔を知らずに育つ。愛情が純真密接でないから、娘を賣るのも、豚を賣るのも、精神的衝動に大した相違がない。

第三は、貞操觀念の低劣である。彼等は益正月を書入時として盛んに愛慾共産をやる。往々にして瓜の蔓になすびの子が出来たさて泰然自若である。だから賣られた娘も、美しい着物を着られるだけ幸福だと思つて居るらしい。

悔改可能か亡國必至か

(エレミヤ記第三章の解釋問題)

イスラエルの預言者は、何れも皆國民の罪を責め、其の必然の結果として神の審判に由る亡國の到來を預言した。されど彼等は單なる占師ではなかつた。彼等は人類の大教師であり、正義に基く國民の大指導者であつた。故に國民をして己が罪を認め、悔改めて義しきに歸へらん事を勸告した。

爰に於てか次の如き問題が生ずる。預言者は果して亡國の必至を確信して、それを述べたのであるか、抑も亦、國民の悔改の可能を認め、若し悔改める時は亡國は回避し得べしと信じ、亡國の預言は單に國民への警告に留まつたか、之である。

エレミヤの晩年の預言は寸分の疑義なく、國民の悔改は不可能、亡國は必至の主張であつた。勿論彼は道德の大教師として、又正義の大闡明者として、國民の罪を責め、悔改を勸告した。然かも此の勸告に由つて、國民が眞に神の嘉納し給ふ如き悔改をなし得べしと思はなかつた。

神の嘉し給ふ悔改とは、神が要求し給ふ通りの條件に由つて、全然神に其の身を委ね、絶對的に其の聖意に服従することである。神が有りて在り給ふやうな御性質に似る者となる事である。それ故眞の悔改を爲し得るには、何よりも先に、神は如何なる性格を有し、如何に我等に臨み、何を我等に要求し給ひつゝあるかを悟らねばならない。第二に我等の心が欣然としてそれに服し、何等反抗する事なきを要する。

かゝる悔改が罪に陥り、靈眼曇つて神を見失ひ、良心死して水を飲むが如く惡習に耽溺する者に、可能であるとは思はれない。エレミヤが國民の墮落を認識すればする程、悔改の不可能、亡國の必至を確信するに至つた事は明瞭に理解し得る。

只、問題となるのは、此の悔改不可能、亡國必至は、彼が人生の多くの經驗を積んだ晩年の確信であるか、それとも彼が二十歳前後の時、始めて聖召を受け預言者させられた、其の時より直覺先視したところであつたか、即ち若き日に彼は既に亡國避け難しと見たか、或は、此の分に進めば亡國は必至なるも、國民の悔改に由つて、之を回避し得べしと感じたか否かである。

此の問題解決上、前記所載の農村の宗教的墮落に關する、彼の最初期の預言の解釋に深甚の興味がある。而して第二章の最後に於て、『視よ、われ今審判を行はんとす、汝罪なしと云へばなり』(本號一三頁)とあるのを以て、審判の必然、亡國不可避の確信の證據とするには不充分である。然るに第三章に至り、彼はイスラエルの民の悔改を歌つて居る(第三章は五節より直ちに第十九節に連續を見る可也)。爰に於てか、最初彼は國民の悔改の可能を

認め、若し悔改めば國は復興し、亡國は回避し得られるとの希望を有したものの、如くに觀取し得られる。

然るに此の解釋には疑義がある。其の第一は、此の悔改の詩(第三章二十一節以下二十五節)は、他より獨立した一篇の詩であつて、偶々エレミヤ記編纂者がこゝに挿入したものご見るべき理由が多いこと。第二に、此の詩はエレミヤの青年時代に最も大なる感化を與へた、ホゼヤの預言の影響の下に作られ、ホゼヤ書第十四章と殆ど同一の感情を述べ、『われ汝の背反をいやさん』の如きは殆ど同一の言辭を用ひてあり、而してホゼヤの預言其物は、悔改めて亡國を避け得る事を述べたのでなく、却つて亡國の彼方に、理想の民が悔改めて神に服ふことを歌つたのである、故にホゼヤの預言の感化の下に、且つその感情と言辭を同じくして民の悔改を歌つたものごせば、此の篇は悔改に由つて

亡國を避け得る確信を述べたものご思考出来ない。

故に、此の悔改の篇は、現實の民の悔改を歌つたものご見ず、寧ろエレミヤが民を愛する餘り、理想の民を心に書き、その眞面目なる態度、深刻なる罪の悔改、而して神との關係が古の新郎新婦のそれへの回復、限りなき祝福の理想を歌つたものご見るのを適當とする。

エレミヤは始めから、神の審判として亡國の不可避を預言せしめられたものご見る方が正當と思はれる。

エレミヤの初期の預言(第二章より第四章五節迄)は數篇の詩の集合である。其の中第三章十四節より十八節迄はエレミヤの作でない事は異論がない。同章第六節より十三節も怪しまれて居る。之は散文であつて詩でない。前後との關係については興味ある議論があるが、こゝに載せる餘裕がないのか遺憾とする。

軌近考古學と舊約聖書 (五)

アブラハム觀

小 栗 襄 三

一 語言の意義

舊約書に顯はれし彼の名は創世紀第十七章五節迄アブラム(ʾAbraham)即ち『至高の父』として記述せられ、其後はアブラハム(ʾAbraham)即ち『衆人の父』と呼ばれてゐる。回教徒は彼をイブラヒム(ʾIbrahim)と呼び、字義は希伯來語と同様なり。埃及第二十三王朝のシエシヨンク第一世(Sheshonk, I.)のカルナック名簿には P^1ihr^1m ʾbrm(No. 11, 12) がありて『アブラムの原野』なる文字を見る(參照 Spiegelberg, Aegypt. Randglossen zum AT, 14) 又バビロニア語原に就ては、ウングナド教授のバビロニア、カムラビ王朝時代の文書にしてデイルバットより發掘されし文書の研究に依り、原語學

上類似の型を獲た。即ち A-ba-am-ra-na, A-ba-am-ra-am, にして、翻譯上多少の疑問あるも、『彼れ父を愛す』と譯し得るのである (參照 Sage und Geschichte in den Patriarchenzählungen)。

斯如く彼の名の各地に於ける變型を彼の生涯と照合する時に、先づ彼の生涯の初期に、『彼れ父を愛す』の生活に初まり、成人してカナンの地に至る彼は『至高の父』となり。エジプトに入りて彼の生涯の基礎を作り、再びカナンに入りて『衆人の父』となりて全生涯を完ふたと見る事が出来るし、又彼の信仰生活を、各地の人が斯る名に於て見出したとも見へられる。乍併ら、此の變遷はエホバの神が彼の全生涯を通じて、彼の救を完成せしめ給ふた道程であり、之が其の名にかやうの變化を與へたのである。

二 回教のアブラハム觀

コールアン (Kor'an) 經に顯はれし彼は回教信仰

の重要な地位を占め、ムハメッド・アリ (Muhammad 'Alī) 誕生前の豫言者中、モーセを除く誰よりも偉大なる神の豫言者としてみなされ、聖典中百八十八句以上も費されてゐる。彼はアラブ人には彼等の先祖と信せられ、ムハメッドと同じ立場にある宗教改革者と目されてゐる。彼はアラブの聖召を受けて後ち、先づ神を祭る發壇を最初にメッカ(?) に建て、此處に於て神と聖約を結んだと考へられてゐる、彼等はアブラハムに、彼等の信する豫言者なるもの、最高の純潔性を見出してゐる、即ち彼の信仰、正義心、純心、至誠、憐憫心等の道徳的規範の結晶そのものとなし、彼を回教徒の豫言者中のイマームと爲してゐる。

『視よ、我れ汝を人類の龜鑑イマームとなす』

コールアン經二ノ百十八

聖典以外に於てアブラハムに關する傳説には、ムハメッド・アリ、アルハダハダ等の奇蹟的行爲

が一般に信せらるゝ如く、彼にも亦同様の奇蹟が行はれたと傳えられてゐるが、此れは唯單なる彼等の宗教的信念に超自然性を求めたに過ぎないこと云ひ得る。

三 猶太教のアブラハム觀

猶太教のアブラハム觀を知る資料としては、タルムード (Talmud)、タルグーム (Targum)、アブラハム默示録 (*Aras d'Avros 'Abraham 'Abramo*)、ユダヤ古代史 (*Toubairey 'Aoyakovaya 'Apostol*) 等に主なるものなるも、此外にラビ文書がある。彼等獨特のアブラハム觀を二三引用するならば、

『アブラハム神を知りしは三歳の時なり、「アブラハム我聲に従へり」(創二六・五)とあるが如し』 *Nedarim, fol. 32. col. 1.*

『シナイ山にて律法の與へらるゝ以前、アブラハム既に律法を悉く遵奉せり』

Kiddushin, fol. 82. col. 1.

『アブラハム總ての誠律を守りしが、割禮を受くる迄は完つたからざりき』 *Nedarim, fol. 31. col. 1.*

『アブラハムは巨人中の巨人にして、身長七十
四人分あり、彼の食物、飲物及び力量は七十
四分に相當す』 *Sophrim, Chap. 21.*

此等は猶太教の見界に就ての一例に過ぎないがそのアブラハム觀の根本に就ては明白なるものがある。それはアブラハムの信仰を全然無視して、彼等の宗教を歴史的に價値付けんとして、又彼等の信仰、即ち儀式、誠律に忠實なることに由つてのみ、救の完成ありと爲す考から、之を解釋してゐる事である。更に甚だしきに到りては、當時のラビの有福なる生活は、アブラハムが其の模範を示してゐると云ふが如くに迄も、我田引水の解釋を附加してゐる (參照 Ben Uzziel, Yerushalmi, Jasher, chap. XXVII. vs. 37)。又彼を極端に偉人化する爲めに七十
四人力説を掲げ、又奇蹟的行爲を彼の傳記中に織

込んでゐる。斯の如く徹頭徹尾彼を猶太教の信仰範疇内に鑄込み、アブラハムをしてモーセ以上の偉人、また律法者となして、彼等の儀禮、形式宗教の典型をアブラハムとなしてゐる（參照 Avodath Hakodesh, Part. 3, chap. 20)。

四 舊約のアブラハム觀

而して舊約聖書記者のアブラハム觀は如何、舊約史上に於ける彼の地位には獨特なるものがある。彼はモーセの如く、又預言者の如く、特別なる使命を帯びて神の聖召に與つた者ではなかつた。彼は唯エホバの神を信じ、絶對に彼を信賴して與へられた人生を雄々しく歩んだのである。信賴して歩み遂に彼の救は完救されたのである。ノアの救ひは混濁せる外界との絶交にあつた。乍併らアブラハムの救ひは、混濁せる社會にエホバの神を信賴して放浪生活を爲すにあつた。放浪生活を一步と踏み占める度毎に、起る事件に従つて、彼

の信仰の巡禮は信賴の進展を示したのである。

然らば彼の絶對に信賴せしエホバの神は、彼の眼底に如何なる姿として顯はれたであらう乎。彼の神エホバは、天地の主なる至高き神(創十四・二三、二四・三)にして全地を裁き(十八・二五)又民を栽く(十五・十四)と共に、個人に迄も到り(二十・十七、然も過去、現在、未來の永遠に在す神(二一・三三)であり、正義(十八・二五)にして、眞實(二四・二七)を愛し、慈悲(二四・二七)深く、善を(十九・十九)好み給ふ神であつた。斯る神を信賴せし彼には、神も亦彼に夢に(二十・三)、異象に(十五・二)又人の形を取りて(十八・三)自らを顯はし給ふたのである。アブラハムはエホバを信賴して歩み、旅人の姿をとりし天使を、神とは知らずに己が天幕に迎えて饗應して之を喜ばし、又自己も喜びの内にあつた。かゝる彼は衷心よりイシマエルの爲めに、ソドム、ゴモラの爲めに、ロトの爲めに、又アピメレクの

爲めにエホバに祈つた。

斯るエホバの神を對照とした彼の信頼は、當然より深く進展し、事件に遭遇する度毎に信頼より信頼へ、信仰より信仰へと進み、彼の道を踏み續けたのである。その道程に於ける最高峰は祈りに祈つて與へられた嗣子イサクを迄も、自らの手によつて神に捧げ得らるゝ迄に進んだ時であつた。

此の時現在の世界を超えて、彼に未來の榮光が明白に輝いた。死によつて終末を告ぐる現世に、今や死を足下に蹂躪し、永遠の救なるエホバを眼近く見た彼は、エホバを確實に體驗したのである。

舊約史の書くアブラハムの生涯は、斯る事實と彼の體驗を語るに際し、アブラハムが神に對して何を爲したか云ふのではなくして、神がアブラハムに何を爲したかを云ふにある。彼は萬事を彼自身の力に據らず、萬物の支配者なるエホバの約束を信じ、彼を絶對に信頼して生涯を送つた。而

して彼の生涯を通じてエホバが如何に彼に顯はれし哉が舊約記者のアブラハム觀の中心問題である。抑も舊約史は此のエホバの神が、彼自身をキリストなる焦點に向つて、漸次各時代に各人物に、如何やうに顯現せし乎を示すことをその中心問題とするものである。

神の人エリヤの雄々しき生涯、神の人モーセの勇壯なる生涯、聖召に頼る使命の遵奉者の生涯は目醒しく、且つ衆人の眼には偉人として輝き、又憧憬の念を深からしむ。乍併ら、信頼より信頼に活きて生涯を放浪の旅路に費すことも亦、記者に優ることも劣らざる神の慈愛の御手を知る。前者敬す可く、後者親む可し。彼こそ誠に衆人の父である。

過 去 追 想

齋 藤 宗 次 郎

我々の有つ過去の一切の經驗は、其善きにせよ悪しきにせよ、永久に離れざる一種の不動産である。之を單に自分の意志感情の産としてのみ見れば、意味淺薄否醜惡眺むるに堪へない。然し天の父なる神が常に其大愛の攝理を以て凡ての場合に暗より光へ、危難より平和へ、滅びより救ひへと護り導き給ひし踵を尋ねて其御心を曉る時に、前生涯悉くが天に達する階段の如くに一つ一つ尊いものになつて来る。長くもあらぬ大切な人生の戰場に於て、親しく嘗むる所の疾病貧困苦惱罪の苛責迫害等血と涙とを以て染めなされし經驗は、個人として民族又は國民としても決して無意味のものではない。夫れ故忠實なる過去追想は、未來の待望と共に、天の助けを得て人々の當然爲すべ

き事と信する。左に此事を明かにする事實を掲げて見やうと思ふ。

ユフテテ河畔に於ける裕福なる生活から導き出されし信仰の祖アブラハムに對し(創一三、一四)「爾の目を舉げて爾の居る處より東西南北を瞻望め凡そ汝が觀る所の地は、我之を永く爾と爾の裔に與ふべし。我爾の後裔を地の塵沙の如くなさん」との誠に重大なる希望の約束を與へ給ひしエホバ神は(創一五・七)「我は此地を汝に與へて之を有たしめんとして、汝をカルデヤのウルより導き出せるエホバなり」と告げて、彼の古き生涯、新しき旅路に於ける許多の經驗の追想を促し給ふた。彼は之に依りて弱き眞の自己を知り、特に愛と能力の神を識ることは出來た。又神の祭司メルキゼデクがシヤベの谷に於てアブラハムを祝福したる感謝の祈禱には(創一四・一九)「願くは天地の主なる至高神アブラハムを祝福み給へ、願くは汝の敵を汝の手

に付し給ひし至高神に稱譽あれ』といつて、群る敵の中に孤軍奮闘、勝利を得させられし苦難と恩寵との經驗を想ひ出さしめたのである。

次に神の人モーセが其民に向つて、汝の先祖たちに誓ひ給ひし彼の乳と蜜の流るゝ地に至らしめ給はんとの預言を告ぐる前にモーセ民に言ひけるは『汝等エジプトを出で、奴隸なる家を出る此日を誌えよ。エホバ能ある手をもて汝等を此處より導き出し給へばなり』といつて、追撃軍の手、曠野の饑渴、アマレク人の劔より助け出されし神のみ恵みを追想感謝信頼せしめんと努めて居る。それより叛服常なきイスラエル人に對して神を義の神、恩恵の神、救ひの神として永久に忘れざらしめんが爲に(利一九・三六)『我は汝等の神エホバ、汝等をエジプトの國より導き出せし者なり』と幾度も告げ給ふたのである。

想へば我々も皆エチプトの壓制、罪の束縛、死

の刑罰より導き出され救ひ上げられたるものなれば、イスラエル人の位置に身を置いて此神の意味深き御言葉を味はねばならぬ。詩篇百三十六篇は有名なる感謝の歌であるが、其數へ舉げられし二十六回の感謝は、選民の上に神の爲し給ひし過去の恩恵の經驗事實を追想して發したる讚美の歌である。寔に感謝は神に對する最上の禮拜であるから、凡ての人をして此歌に則りて、各自の曲折多き生涯を蔽ふ神の恵みを感謝せしめんとする精神の存するを見るものである。

然るに(腓三・二三)『兄弟よ、我自ら之を取りたりと意はず、唯此一事を務む、即ち後に在るものを忘れ前に在るものを望み』云々の聖句を軽く解し彼パウロが新しきキリストの信仰に對して、舊き律法に由る己が義なるものゝ價値なきを諭したるに思ひ至らず、『後に在るものを忘れ』の眞意を誤認し、神の愛護の下に送りし生涯の道程、即ち凡

ての人が其力量に應じて綴らしめられたる貴重の教科書を放擲して顧みないのは、將に偏狹なる信仰に陥るの大なる原因となるのである。視よ。同じパウロはエペソ人に對し(弗二・三)自らの經驗をも含めて、『我儕も皆曾て罪の中に居り肉の慾に循ひて日を送り、肉と心の慾ふ任をなし、他人の如く本性にして怒の子なりき』と述べ、今在る所の恵みの如何に大なるかを教へて居る。又彼のアンテオケの會堂に於ける説教には、イスラエル人の長き過去の歴史を諄々と説き來り、其結論に於て、『爾曹モーセの律法に依て義とせらるゝ、こゝ能はざる凡ての罪も、信する者は皆彼に由て赦され、義とせらるゝ也』と眞理の奧義を示して居る(使一三・一六)。次にパウロがエルサレムの陣營の階の上に立て、有司兄弟民衆の前に述べし説教(使二三・一)も、カイザリヤに於てアグリッパ王及びベストスの前に熱心に語りし言も、曾て彼がダマスコ途

上に於ける改心贖罪の絶大なる事實の追懷告白であつて、其結ぶ所は『往け、我爾を遠く異邦人に遣すべし』の使命の自覺であり、キリストの十字架の死と復活との明白なる證明であつた。而して更に彼は『噫々われ困苦める人なるかな、此死の體より我を救はん者は誰ぞや』(羅七・二四)と極めて悲壯なる聲を震はして、昔も今も變らぬ心の法と罪の法との苦闘の體験を述懐し、然も終に、『是れ我等の主イエス・キリストなるが故に神に感謝す』と叫んで居るのを聞く。

實例を挙げれば限りないことであるが、昨年三月末内村先生が將に臨終の迫れる病床に在つて、我々に傳へられし言葉の一節に、宇宙萬物人生悉く可なりとあるは何であるか、彼が此世を去るに臨んで、愛なる神の恩寵に基く、七十年の生涯に横はる無数の經驗を追想し、主の十字架を中心とする信仰の歸結斷案を下したものに相違ない。余

の如きも神のみ前に怖れ戦慄きつゝ、己が歩みし跡を追想して遂に罪人の首たることを自覺せしめられ、一切の事實は不知不識暗黙の間に、主の十字架を要望し絶叫したるものなることを悟り、一捨て難き財寶の如く感ずるに至つた。

最後に言はん、イエス酢を受けし後言ひけるは『事畢りぬ、首を俯れて靈を付せり』(約一九・三〇)と。ア、壯嚴の極、偉大の極、眞に是れ一日の寧日もなき三年は愚か、三十餘年の御生涯をも越えて百年千年否世の始めよりの漏れなき預言、試練、恩恵の追懷を總括して、之に勝利の封印を施し給ふた贖罪の十字架上に於けるイエスの絶對的宣言である。

誠に人の歩みはエホバによりて定めらる(詩三七・二三)。願くは我等皆聖靈の恵みによりて、過去の經驗の上に天父の聖意を正解し、萬事悉く可なりとの美はしき確信を懷くに至らんことを。

柏 木 通 信 (第十二信)

齋 藤 宗 次 郎

柏木の近狀 憩ふべき札幌の夏を、圖らずも令孫の看護の爲め心身の勞苦に送られし恩師夫人は九月中旬に歸京せられた。其後例年になき健康を以て獨内外雜事に當つて居られる。今や庭前の紅葉は深山の美はしさを染めなし、秋を飾る柿の實は豊産の喜びを呈して居る。西京の松茸、花卷の里芋なぎ交々門を敲いて寂しき家庭を賑はすは興多きことである。階上の全集編輯室に於て、靜かなる勞働の間から屢々讚美の小聲が漏れる。今は此隠れたる一室は國の内外に於ける同志教友の祈的となつて居るのである。史を録する者の見通すべからざる事實である。東北の或る有名な禪寺の主僧の如きは先生の日本に與へし偉大の遺業感化を讀し、全集刊行の企を聞いて祝賀の詞を密せて來た。

十一月六日恩師思ひの大賀氏奉天から突然やつて來て、積る温情を披瀝して後編輯室に當つる書齋に入つて正面の椅子に腰を据え、先生在りし日の追憶談から滿蒙の現狀を語り、我等は基督の心を以て最愛の日本は勿論可憐なる善隣支那の爲に切に祈らねばならぬと溢る、所信を吐露して去

つた。○今井館講堂は毎日曜日午前午後共主の爲に教友の集る所として用ひられ、玄關の左右に各々一室を仕切つて日曜學校に供すること、なつた。○預言寺には此秋以來淺野氏居住して邸内に重きを加へ、今は新しき門も出来て面目一新となつた。○附近に開店せる獨立堂主人は意味ある處女出版に於て西岡虎造氏譯ゴードーの基督の神性なる好著を公にせしは我等の喜ぶ所である。今後機を得て此種の出版物により日本の靈界に應分の貢獻をする事であらう。

日曜日の集會 權利でも義務でもなく、靈感に動かさるる基督者の自然の行爲として集るもの毎回三十名内外、此處には禮拜氣分の作振も雄辯學の應用も要らない。只嬰兒の如くに、只饑え渴くもの、如くにイエスを慕ひ仰ぐのみ。

一、船長としてのイエス 山 栞

イエスは船長であり機械である。然り船夫れ自身即ち眞理其物であり給ふ。斯くて彼を信する者を見事に天國の港に導き給ふ。聖書も歴史も教友會も我自らも亦之を證明す。誠にイエスは天地間の唯一の交通機關であり給ふ。

一、患難に處する教訓 淺 野

雅各書一章の教を講述したる後、秋野靜子の晩年と死との事實を以て、信仰に生くる者の患難に處する美はしき態

度を紹介せらる。

一、内村先生の遺業及遺訓 鈴木

先生の多くの遺業の内、外國傳道として支那及びアフリカ人に深き同情を寄せ資金を贈られしは實に偉大なることである。日本を敵視する支那人、文明國が野蠻人として嫌ふアフリカ人を斯くも愛するといふことは基督の心を心とする者でなければ出来ない事である。次に臨終に先だちて互に相愛せよ互の長所を認めて相愛せよとの教訓を遺されしは永久不變の至言で我等一同の堅く守るべき精神である。

一、イエスの血と肉 名古屋

同じ題にて先生の書かれし文を朗讀したる後、此最大事實に就て此の所信體驗を述べ、基督者の生くる途は只イエスの血を飲み肉を食ふにありと説き、最後に此根本の事實を閑却せる現代基督教の爲に悲歎の聲を發した。

一、現代に處する基督者の態度 大 嶋

科學宗教の混沌たる今日の世に處するには、神の天然の法則信仰の法則に従はねばならぬ。神を自分の方に引張らうとせず進んで神の恵みに近づくは勝利永生の道である。

一、滿蒙事變の真相と余の決心 大 賀

長く滿洲に在りて樞要の地に働きつゝ、ある氏は夙に日支

間の實狀を知つて平和攪亂の兆あるを悲み來りしが、事此處に至つては其解決を人間の智と策に俟つも詮なく、余はキリストの十字架の精神を以て最善と信する所を實行するに決す。諸君相共に日本國の上に聖旨の成らんことを祈られよと切言す。

洗足會例會其他 秋晴れの爽快なる日の午後三時から郊外蕨窪なる藤本武平二氏宅に開會、會する者十名。○十年前始めて此會が開かれし時、内村先生の與へられし單純なる教訓は一大生命となつて常に敬虔と純潔とを守り得るは大なる感謝である。○生命の保險に注意するも、靈魂の保險を怠るは大なる不幸である。古き研究誌を讀んで信の第一義に立つべきを悟りたる幸福。○多辯の禍を醸すに氣付き、心すべきを痛感す。○罪は塵の如しの古人の言を説明し、子孫に遺すべき最良のもの、何なるかを考ふ。○内村全集刊行の意義及び價值等の感想を話さる、間に數名の祈あり、樂しき晚餐を共にし暫時清談の後八時散會。○次にモアア婦人會例會は相州片瀨一色氏邸に開かれ、閑靜なる松林の中に十數名の姉妹等相集り、讚美と祈禱と食事を共にし黄昏に入つて歸途に就きし由。○柏木日曜學校にては三人の教師早朝生徒を引率して武州松山附近なる吉見百穴

に遠足し、城址を一時占領して晴空の下秋草の褥に讚美の歌を捧げ自由の行動に心を澄して三時頃歸京の途に上つた。石河光哉氏の渡佛 曾て本欄に報ぜしクリスチャン洋書家たる氏の渡佛は其後準備徐々に整ひて愈々十一月上旬長途の旅路に就くこととなつた。美術の研究は主なる目的たるは勿論なれど、基督の基督教無き西歐の一角に純福音に生くる一個の靈が移さる、ことには我等の知らざる使命の存することであらう。靜かに止つて祖國を守る我等は只管氏の靈肉の爲に遙かに其祝福を祈らねばならぬ。

地方雜信 一、桐生は千葉の鳴濱、栃木の宇都宮と同じく、親しく福音を傳へられし度數の多き土地の一である。日永、竹内兩氏が長く本城を守り來つて公私共に其信仰責任を明かにして居るが、其他の教友は靜かに生命の泉に飲んで獨立の基礎を養はれつ、あるとのことである。

二、札幌なる淺見仙作氏は、夙に基督者たるの恩寵に預かりし使命を感じて、十字架の證明の爲に北海道の山村都邑に於て多年聖戰を繼續し來つた。頭上霜を頂いて活動益々強く、今は同志の集會を土曜日に開き、日曜日には親しく鑛山を巡つて多數の勞働者の間に贖罪の福音を宣傳し居るとのことである。キリストの父なる神に在りて歩み祈を以て國を愛する人は眞の國寶である。

祖父の書翰 (三)

江 原 萬 里

祖父は江戸に於て生計を營み度く思つたが、老母は故郷を遠く離れることを欲せず、因つて郷里赤穂に近い何れかの藩に仕へる外なかつた。鹽谷宕陰は之を以て祖父を美作の津山藩に周旋するところあつたらしい。津山は赤穂藩王森家の祖先の舊領地であり、その墓所のある地である。爰に於て津山近郊の庄屋中島氏の乞に由り、一先づ其處に家庭教師として赴くこと、なつた。時に齡二十七歳。歳末其の地に着いた。前掲日記に宕陰の恩を謝し『今の一去は他日の面謁を期し難し』と書いたのは、その事を云ふたのである。

居ること五ヶ月、翌年五月、彼は津山藩に召出され『藩校學問世話並に講釋』を仰付けられた。此の五ヶ月の間、津山藩では専ら祖父の身元及び才能を嚴重に調査試験した。赤穂藩追放についての調査報告に次の文がある。

右同人儀生國退去の始末に悪く申觸もの有之に付、不審の儀も有之哉に奉窺候得共、同人に於ては聊か以て不忠の所業相働候ものには無之、彼國從來の弊風改革の儀に付一己の不勝手に相成可き儀を嫌ひ候者の讒言に寄つ

て放逐致され候ものに相違も無之趣彼藩中のものに承候。次に祖父の學問及び才能の考試として『同人へ面談の席を以て、萬人講を島方(領地小豆島)に興行相始め可然哉、博奕市郷共相弛め可然哉、國産の品は専ら仕出し可然哉、質問致し』た。之に對し祖父は漢文を以て答申書を認めて差出した。其の意見は常識に富み、世故に通じ、然かも儒教の眞髓なる、道を以てする治國平天下の精神を明にし、產國立國に反して人材立國論を唱へたものであつた。今爰に此の議論を掲げる餘裕はない。

津山藩の學問講釋の囑託を受けて二ヶ月目、祖父は藩主に上書して、時局に關し直接面謁、重要意見を具陳し度き旨を申入れた。書中彼は故郷を放逐せられ、郷黨に棄てられ、取る處なき身を以て教授に任命せられた知遇を謝し、如何にしてか其の恩の萬一を報ずべきかを日夜憂悶せることを述べ、次で云ふ『臣今蒙る所の職は獨り子弟を教授するのみならず、亦講官を兼ね。夫れ我の講官は即ち彼の諫言なり』とて、漢の諫官の如何なる者であつたかを説明し、君臣の道隔り、上下の情絶え、終に亡滅に至るのは、諫諍謀議の路なきためである。諫官は即ちそれに備へたものである。我が國の講官が彼の諫官であるならば、『臣の職豈大

且つ重ならざらんや。性愚才薄を以て此の重任に當り、藩の家老以下士卒に至るまで常に己が意見を開陳して居るが未だ藩主に對して語るところなし。然るに「臣又國家のため言はんご欲する數件あり、之を衆中に論ずべからず」、親しく藩主に謁して之を具陳し度い。英明の許否を待つと。

「國家のため言はんご欲する數件」が何であつたか知るに由ない。然かも「之を衆中に論ずべからず」親しく面謁具陳を要すごあれば、藩政上の重大意見である事は想像し得られる。藩主は祖父を引見、その意見を聴取したに相違あるまい。それがあらぬか、七月に此の上書、十月には儒員として本官となり、其の月一躍「國事周旋掛」を命ぜられ、津山藩を代表して京都に駐在し、専ら朝廷及び勤王黨の諸藩との外交の任に當らしめられた。他國より入り來た浪人者が藩の囑託となつて講學僅か十ヶ月、此の重任に當らしめられた事は異數の事と言はねばならない。殊に茲に注目すべき事は、此の他國者が豫てから抱懷して居た勤王論が藩の大方針として採用された事であつた。

抑も津山藩主は徳川十三代將軍の子であつて、將軍家とは御三家以上に親しく、津山藩は幕府の親藩として當然佐幕主義であらねばならなかつた。先主にして此の時既に隠

居して江戸に在つた當主の兄確堂は明白に勤王攘夷論を好まなかつた。然かも藩論一決、祖父の意見と一致し、彼は一躍藩を代表して今や日本國の政治の中心となつて來た京都に赴任するに至つたのである。此の時以來、彼は京都と津山との間を度々來往し、又江戸の老侯との間の調和を計り、外は他藩の勤王の諸士と交り、藩を代表して他藩と誼を通じ、津山藩をして孤立せしめる事なく、同一歩調を以て王政維新の大業に参加せしめやうと盡力したのであつた。

祖父が國事周旋掛を命ぜられ、京都に赴いたのは文久三年十月、祖父の二十九歳の時であつた。此の年の暮、赤穂藩士十三人が嘗て祖父を放逐した國老森主税及び祖父を憎むこと甚しかつた反對派の首領村上眞輔を殺害し、即夜自首したが、吏堅く門を閉ざして應ぜず、已なく藩を脱走して土佐藩に投ずるに至つた。祖父は圖らずも京都に在つて此の報を聞いて驚き、且つ人情としていたく喜んだ。それと同時に事の甚だ重大性を思ひ、年寄森續之丞に書を送り、善後の處置を誤らぬ事が肝要である旨を忠告した。之が私の載せやうとする書翰である。其の前に少しく何故十三人が國老を殺すに至つたかを説明せねばならない。

編輯餘錄 主筆

○今を去る千九百餘年前、ユダヤのベツレヘムの郊外に於て、時ならぬ光輝き出で、天使が『民一般に及ぶべき大なる歡喜の音信』を傳へた。即ち我等の救主の出現であつた。天の衆群相和して讚美歌を歌ふて云ふ。

いと高き處には榮光、神に在れ、

地には平和、主の悦び給ふ人にあれ。

○今地は擾亂の巷、然し乍ら我等キリストを信する者の心には言ひ盡し難き平安と歡喜がある。何人も之を我等より奪ひ取るものはない。地上の平和は既に我等に到來した。まことにキリストの出現、而して我等の衷への示現こそは之に越ゆる『大なる歡喜』はない。

○今年私はキリストを信する事のどれだけ大なる幸福であるかを感じた。田中良雄君其他多くの親しい友の友愛に支えられ、讀者諸君より寄せられる友愛に感謝した。我等の周囲に見えざる愛の團體の存在する事を知つた。之キリストの成し給ふ處である。

○私は本年險惡なる病患のため一時は死を覺悟した。多分此のクリスマス號が私の執筆し得る最終號であらうと思つた。然るに私は不

思議に不治絶望と見られる病から癒えた。私も人も怪しむ奇蹟である。私は此の經驗に由つて今更に私の説きつある福音は單なる思想でなくして、實際的生活の力、人間生活の根本的完成原理であることを確信するに至つた。神はキリストに由り常に我等の靈魂を完成し給ふのみでなく、肉體をも養ひ、其の病患を癒し給ふ事を實驗した。

○近時病患の精神的治療が世人に注目せられて來た。藥物療法が無力により物理療法が唱へられ、物理療法も亦効果少なく、之に代つて自然療法が唱道された。然るに近來人間の精神と肉體との密接なる關係が知られ、殊に最近心理學上、人間の心の一段奥底に在る潜在意識の探求精細となり、そこに於ける混乱は直ちに人間の肉體に影響し、生活力を殺ぎ病氣を生ぜしめる事がわかつて來た。多くの病氣は藥物もレントゲンも日光も空氣も到達し得ない深淵から生ずる事が知られた。

○此の潜在意識の領域は、心理學者ザエームズに由れば、神の領域であり、又惡魔の働きかけるところである。イザヤ、エレミヤ其他イスラエルの預言者が見た異象は、此の領域が意識界に湧出したものとして説明せられ

又主イエスが病者に内在する惡魔を叱責し之を追出し給ふたのも、此の領域に於ける神の支配として説明せられるのである。

○精神的治療は多くの迷信を伴ひ易いが、夫が眞實である事は今や疑の餘地はない。病に患ひ、日夜懊惱轉々する人よ、今尙諸君の側に在つて信頼を求め給ふキリストに頼り、彼に祈り求め給へ。癒しの能力は彼より來る。私はこの事を實驗した。

○私は之に由つて愛する多くの人々の祈に負ふところ甚だ大なるを思ふ。尙藤本重太郎氏及び石井華子夫人が私に極力三分搗米の常食及び肉類の節食を勧められ、之に服つた事は效果多大であつた。又醫學士池田千壽君の灸はきいた。醫學士湯澤健君と工學士濱田成徳君の好意に由る水銀燈も亦甚だ効果があつたやうである。爰に記して謝意を表する。

○私の無教會主義不唱説には多大の賛成を得た。反對論には注意したが、若し藤井武君が居たら有力な説が聞けたであらうと、今更彼の長逝を惜しんだ。因に、近版の『藤井武君の面影』の豫約を御勧めし度い。

○之を以て本年を送る。讀者諸君の上に祝福を祈る。

本誌舊號の提供

本誌の讀者にして傳道用又は紹介用に本誌の使用を望まらるる方に、本誌舊號を提供します。充分利用下さい。

- 一、思想と生活、聖書之眞理、何れも提供す。
- 二、書店よりの返本混入するを以て表紙多少汚損のものあり。
- 三、部数は幾部にもよろし。但し發行番號の連續せるものの申込は御斷り。
- 四、右に對して若し寄附金の申込ある時は、多少に拘はらず喜んで受納、我國福音傳播のため最も有効に使用す。

申込所

東京市外澁谷町向山九七

聖書之眞理社

振替東京六三三七五番

クリスマス贈物として適好

江原萬里著

聖書の現代經濟觀

定價一圓二十錢 (送料八錢)
總布裝函入二八〇頁

求道者、不信者に力ある基督教を知らすには有力と信ず。

内容抄録。故郷歸還、運命か攝理か、ガリラヤの春、士族の商法、胃の膾哲學、鈴木馬左也翁・ガリソン、基督者とは何者か、後篇富の増進。等長短三十篇
著者の署名希望の方は直接本社へ申込のこと。

豫約出版

藤井武君の面影

定價壹圓 送料東京六錢 地方十四錢
豫約申込期限、昭和七年一月十五日

純眞、眞劍、嚴肅なる道德を以て身を持ち、燃ゆる如き熱情を以て理想を慕ひ、清潔を愛し、然かも胸中人に對してやさしさに満つ。敬すべく愛すべき彼に對する友人の追憶録である。
(全集とは別)

東京市外大森八景坂上、矢内原方

藤井武全集刊行會

振替東京三九九七九番

聖書の眞理定價 (送料共)

- | | |
|----------|-----------|
| 一 部 | 二 十 錢 |
| 半年 (六部) | 一 圓 十 錢 |
| 一年 (十二部) | 二 圓 十 錢 |
| 海外一年分 | 二 圓 六 十 錢 |

拂込は振替東京六三三七五番
聖書の眞理社宛のこと

思想と生活 合本

- | | | |
|-----|-----------|------|
| 第一卷 | 二 圓 | 送料八錢 |
| 第二卷 | 一 圓 八 十 錢 | 送料六錢 |
| 第三卷 | 二 圓 三 十 錢 | 送料八錢 |

昭和六年十一月廿七日 印刷納本
昭和六年十二月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三

編輯印刷 江 原 萬 里
兼發行人

發行所 東京市外澁谷町向山九七

名古屋市中區流川町一八

印刷所 一粒社印刷所

東京市外柏木九四六

發賣所 獨立堂 書房

振替東京一九四六八

(昭和三年二月十六日)
第三種郵便物認可

聖書之眞理 第五十號

昭和六年十二月一日發行
(毎月一圓一日發行)

本誌定價二十錢